

9-28

166
247
340

大和めぐりの記

目次
空満大和
青にょ
あら

空み津大和

明けく治まれる御代のいはたちあまう六年の、十月廿四日といふに、近きあたりの友ども
 といある人をとひし、その歸るさにいひけらく、如何に君よ、おのれ年頃、彼の空み津大和
 の國の青によし寧樂の都の跡、神々のやしろ、世々の御門のみささき、あるはいみしき法
 師はちのすみせしき、歌まくらなどを、見もし、さかへちはやと、思へとも、此の日ま
 て、これぞとて、心あての人もなかりしまゝに、日を送りしか、今日君に、いてあひしてと、
 いとよきさうなれ、と、へは、おのれもまた、をりもかなと、おもへり、されはあした、朝ま
 たきより、いてたし、と、いふ、おのれいと、よろこひて、旅装など、こましくどかたりあひ、
 堅くあしたを約し、わがる、
 宿はまかたり、何となく、心せわしうて、何にくれと用意して、その夜も、いたく更けぬ
 ける鳥のこゑに、先立ちて、とてをばなれたり、と、いふ、
 まへよりふり、いたる雨、なはやまされと、昨日の約、今更かへつへくもあらされは、車に

て、友どちの家に行く、
 かれは早く、軒はの車にもものして、いとまら貌なり、こより共に、車にて大垣ステーション
 午前七時十分、大垣ステーションにつけば、はやあまた人、つとひて、烟草くゆらし、新聞
 紙などよみて、まらぬ、

おなしく廿分、車は進みどめぬ、雨は猶やまず、

車中、關ヶ原を過ぎゆく頃は、空もうらうかになりて、野面の尾花の、秋風になひくもをか
 し、

秋風に、なひける野らのはた薄、いつの代誰かかたみなるらん」と口すさむ、見あく
 る膽吹山は、白き雲棚引きて、朝氣色いはんかたなし、
 三つ四津の乗場もこゑ、米原にいたれば、秋のならひとて、湖止はるかに霧たちて、をり
 絶間より、白帆の見ゆるも、又一入のなかめになん、をちかたの岸はいつれの里なり
 やと問へは、粟津か原とこたへぬれば、

になのうみの、いつかおは津とさるはて、なこりは見ゆる岸の尾花に」とうたふ
 ちち、いつしか京都につく、

日もいまた半なれば、是より東山の名所をも、見はやといへば、又こゝん年にと、友のいふか
 まにどいめつ、

あくれば廿五日のそと、ちちかななり、伏見街道にいて、道すから兼實のぬしの墓にまう
 てぬ、こゝは東山東福寺の境内にて、山のけしきながめさよけし、奥に寝さめの瀧ありて、
 もろ人の歌多くかきけたりければ、おのれも又、

うさとも、けふは寝覺の瀧のおとに、消てさよけき我心哉」と腰をれをすさむ、この

下流に通天橋あり、人々のもみちを見る所なり、この山を少しつたへは泉涌寺にいます、
 この南の稻荷山にいなり神社あり、青くぬりたるうてな、赤き華表、おひたし、夫木集知
 家の歌に一稻荷山、杉の青葉をかさしつと、かへるはしるさけふの諸人」とあり、むかし
 よりかくさかへけるにや、
 はなるれば深草の里にて、人家はほゞ京の町と連なれり、このわたりは小山所々に見る、

森もありて、いとさびしけなり、千載集に「夕されは、野への秋風身にしみて、うつら鳴なり深草のさど」の歌ありかの少將は、うつれのところに生まれしにか、いまは問ふによしなし、

伏水 宇治川のほとりにて町なみ こなたす少やすむ、豊公の桃山殿をとおるへど、時なかり
 伏水 とよのひてにさばし はれどおもふ年のぬれは の歌あり、
 ければ見す、此の川にかけたるぶん後橋 永録年間秀吉在城の を渡り、宇治堤をつたひ、向
 島、横しまの両村 又宇治の川 を經て、 宇治につく 武士の八つうち川のおしろ木にたよ
 ふ波のゆく衛しらす 新古今集人 いまもわしろ木あまた見ゆ、
 丸の歌 九の歌

川つらには水車をかけて、稲田にともへ便とせり此間一里半、宇治橋こゝにかかれり、この橋のほとりに、橋姫のやしろとてありければ、

今日までは、いくよかさねてまぢもし、こころうしてふ川の橋姫」とよむ、古今集に「千早振、うちの橋もろなれをし、あはれおもふ年のぬれは」の歌あり、
 よをうし山 古今集我いはは都のたつみしかとすむ の喜撰か庵、惠心の御法をとかれし所
 は、この向ひの山にありせ所の入はいふなり、

宇治はいはてもしるさ茶の名とてゐて、家ごとに多くの男女茶をつくる、この堤さわにかの融のおどりの別荘たりし平等院あり、こゝには釣殿、鳳凰殿あり、鳳凰殿は、鳳凰のそらより下りて、兩翼を張りたるにかたどられたは、かくはいふなり、家根には一双の鳳凰ありて、風のまにくまはる、
 永承七年の構造今を 前あはれ今のよの人は、むかしどしい
 へは、たゞにのしれども、これらのたてものを見て、いかにおもふらん、此の外寶塔、金堂、經藏ありけれども、治承のみたれに、やけうせしとかや、
 堺内の入口に、源三位の自盡の塲扇の芝とて、石をたて歌などかきつけたり、又陽成水の尾の御かどの御ゆさしたまひしところなり其後冷泉のみかどの御とま、宇治の關白の此地をこひうけて、勅額をたまひかくは名付しと、
 頼政の墓は、かたへの寺にあり五輪の塔婆は猶君かま心をあらわすに似たり、あはれ文に武にたけかりしものよふのはてはどかなし、さのあまりかくなん、
 いま更に、人し仰かん、いにし世の、君かたみの埋木の花」とよみてを手むけてすてぬ、

北にあたりて、いみしく大なる宇治製茶の記念碑あり、昔は朝彦のみこの筆なり、今日は
 いかにもして奈良までゆかんとて、人力車をやどふ、長池までは大むね茶綿花を培養せり
 、ここに少しやすみ、もちといふものをたうへぬ、井手の玉川をよそに見て、玉水をすき、
 木津川を渡る、古歌などに多く泉川とあるはこの川なり源氏物語に、泉川の舟わたりも、
 まこと今日とはいとおそろしうてそありつれ、とあるもこそをさしたるなり、又この川を
 日本記には、桃川の訛なりといへりさもあらん「都いて今日みかの原泉川、かは風寒し
 衣かせ山とある山も、原も、いつれちかき 古今集よ わたりならん、こより奈良山春日山
 は見ゆる、
 木津の里よりは小山所々にありて、道よからねけ車もはかどらす、日くれてやうく奈良
 の橋本町といふところにつく、
 宿は名にし負ふ、さる澤の池のほとりにて、をりもよく月さへあかく、みかさ山よりいで
 ければ、
 さしいする、三笠の山の月を見て、しらでひらたる我たもと哉」ところ昔をしの

ふ、いねんとすれども、明日はいづれの名所より見はじめんなど、いろ々のおもひごと
 にておけぬ、こころのあはれは、いづれもあはれ、いづれもあはれ、いづれもあはれ、
 朝戸あけてながむれば、鹿ははやかきまわれり、心ならずあさかれ飯たきへて立て立、
 春日神社はさしにまさりて、鹿はむれにくてかけまわり、人々の前後をまどひ、かて
 包ふもかわゆし、されどもわやしげなるもの、案内せさせてとつまつはるは、いとう
 るさし、
 この神はもの、常陸の國鹿嶋にましくしかど、都の寧樂となりし時より、鹿嶋の使遠しと
 て、この御山にふり奉りて、春日明神とあかめ奉りし後は、もはら藤原氏の氏神とて、公け
 男女の使たてさせたまひ、二月十二月上申の日さまくの使立てのしりしかど、今はや
 うくさひたる様なり、されども猶神樂の音などは絶す、山城の吉田、大原野の神社も、皆
 この例にならひて、勸請したるものなり、こより北にゆけば、飛火野にいつる、かの春日
 野の飛火の野守と、古今集にあるを見れば、奈良都の時代には、この野にさへ番人を置れ
 しにやど、まつ當時の榮えし様と思はる、又武藏野といひて、古歌いと多し八幡宮は手

向山の麓にて、社殿などは大かた千年餘は経たらん、もみちの錦神のまに古今集此、
もどりあへず手向山もどむかし某はいひけれど、今は秋猶あさければ、させんすへもなし、
みちの錦神のまに度はぬさ、
さてよみける、

旅のそら、何をかぬると手向山、神もしるしの心ひとつを」と心ばかりの手向す、二
月堂はとなりにて、いみしゆさかひたり、三月堂、良辨堂などあり、

大佛殿は、聖武帝の建立にて、日本國の總國分寺なり、堂のやかき十六丈東西三十三けん、
南北二十八けん、又の像たかき五しやう三尺五寸なり、一度は平重衡の兵火にやけ、一度
は松永久秀の亂に堂はやけたれど、其後僧徒の盡力と、當時の人々の信仰により、再建せら
れたり、されどもみかたは變はらず、かたへに常備館あり、首として和州諸寺の、佛像畫像
彫刻物のみを陳列す、あはれいみじくさかひし寺の僧徒たち、おのが道主をおかめてしも
のを令更に、美術品と世の人々にもてあそはれ、いかれり、いふもなく、かへりては
こり貌なるは、いともわかす口惜しき事なり、かくわれはこそ法の道さいよくしけくなり
て、分る人々のいよまたたけ、いなるに、おのなる、是より北に二丁程ゆけば正倉院なり

代の寶器などいと多かるとかや、かくて天蓋門を出れば、奈良の町のはすれにて、佐保川
のほとりなり、

佐保川はきりしにたかひて流たぬくにて、友まとはしてなく千鳥の一つたになし、夕さ
佐保の川らの川風に友まれは、あなすたてといふをりしもわれ、一人の翁いへる様、その上寧樂
の都のありしときは、この川の水もいやなかれになかれて、千鳥もむれぬしなり、萬葉集
に「飯の海の、河原の千鳥なかなかは、わか佐保川のおもほゆるくに」の歌其外この川の歌
を見ても、當時は川も大きくて、千鳥も多かりしなりとかたる、この橋を渡れば佐保山な
り、南の面に聖武帝の陵あり、古今集阪上是則の歌に「佐保山の、柞の色はうすけれど、秋
は深くも成にけるかな」とあるはなへてあたりの山をいひたるにて、別にあるにあらず、
又すこし北にあたりて、元明元正二帝のみささきあり、さてにしのかたへ、二十町ほどこ
しどころに、法華寺村あり、この村にある法華寺は、壽永の昔横笛と横笛は建禮門院の雜
いふもの、引とくむへき心ならねはとよみて、かしらおろし寺なり、されはにや今も横
笛堂といふがのこれり、この寺はむかし淡海公の舊宅なりしを、後に光明皇后の寺となし

たまひしものなり平城の宮跡、高野天皇の陵、成務天皇の陵、城盾列池上の陵を拜、秋篠の里にいてぬ、さきつかたよりむかへの峯にかよりし雲、やや霞ひきて、雨ふりければ、

をりしものあ、れわか旅衣ぬらせとか、時雨ふるなり、秋しのる里」とよむ、新古今集西行か歌に「秋しのや、外山のさとやしくるらん、瞻てまの山に雲のかふれる」のけしきおもひいてらる、この秋しの寺といふは、光仁天皇の御願にて、善珠僧正の開基なり、

西の大寺は奈良七大寺の一にて、伏見村にあり、孝謙天皇の御願にて天平神護元年落成す、仁明天皇を兜卒天宮と仰きたまひき、釋常騰の開基にて、増長天の御かたは、親から鑄造せさせたまひしものなり、

こゝにちかく菅ヶ原村あり、天満宮をまつる、その昔土師の宿禰のやからの代々住にし所とかやにて、舊地名を菅ヶ原、伏見の里といふ、古今集よみ人不知の歌に「いさこゝに、我世は經なん菅原や、ふし見の里のあれまくもかし」とは大かた此の里なり、横領村より尼ヶ辻をへて五條にいたり、招提寺にまうつ傳へいふ此地新田部親王の舊宅なりしを、聖武天皇ひらきたまひて、招提寺と名つけたまひし、と開山は鑑真大僧正とまことる、

午后五時郡山につく、舊城跡は市街の西北の丘上にあり、大和大納て、中學校、柳澤神社あり、かくて宿をもとめて湯にもする頃、空又くもる、明日は如何にと、こゝろつかひをす

る、廿八日朝またさよりあめふりぬ、とまるといふせければとて、身仕度していつたつ、富の雄川を渡り、小泉をへて法隆寺村につく、むかしは班鳩の里といひしなり、かの殷富門院大輔の歌に「かさりありし、鶴の林のかたみをは、とよめ置きけり班鳩の里 夫木集」とあり鶴の林とは、この寺のととなり、さてかたへの茶店にもし、一人の案内をつれて法隆寺にまうつ、今そのいふかまををしるさん、

法隆寺又いかるかてらといひて、用明天皇即位の元年、みことこのりしてつくらしめたまひしものにて、日数は十あまり五年を経たり、これは我國勅願寺のはしめなりける、

夢殿、上宮皇子いかるか宮寢殿の側に造りたまひ、世のはかなきことをゆめにことつけて悟りたまひしにより、かくは名つけぬ、八角八面の構造にて、頂上に青銅の寶珠あり、今より一千年余をふる、御堂關白の歌に「大君の、御なをはさけとまたも見ぬ、ゆめとのまては

しかてまつらん、とあるをおもひして、

うれしくも、おもはゆる哉いく千代の、昔のゆめのうてなみんとは」と合せぬ、

舍利殿、上宮皇子二歳のとき、東天竺の佛舍利をのたなこころになりいてたればかくはいへり「南無佛の舍利をいたせる七つがね、むかしもさとな今も双調」といふ紫式部の歌ありければ、

法の道ふみてこそしれ舍利佛の世に有かたきことの教を」とよむ又はせ哉の「早わらひや、南無佛と露を落しけり」の句あり、傳法堂聖武帝の世七大寺惣別堂行信僧都

班鳩寺孝仁等の學問所といへり此外太子殿などあり、堺内をいて北にゆけば班鳩神社

奥の院あり傍に天満の池ありある人はこれを萬葉集によめる因可の池なりといへり萬葉集十二

かみよるかの池のよろしくも、さみをいはねはおもひそわかする、かくて西院の伽藍にかへる

二王門は二重にて左右に長き廻廊ありこの右わきに現身往生の塔ありこは五重にて即ち

上宮皇子の建立なり、現身往生といふは其むかし蘇我氏この第四層にて太子の親族山脊

の大元を始め男女廿五人を自盡せしめしによるとかや塔内の像は皆金堂も又太子の建立

なり大講堂は延長八年雷火にかぶりたれば承暦の度城州普明寺の堂を遷したるものなり今より九百年餘藥師三尊四天王の像各鳥佛師作

こより少しいぬ亥の方の小高き所に西圓堂あり俗に峰の藥師といふ僧ともは例のともをかたる堂内にいれは大刀長刀を始め種々の寄附物をひたし鏡の如きはあたりの壁柱ともいわずかけられたり信長の矢筒秀吉のひさご順慶のまもり佛をも見受ぬはるかに岡本法起寺三井法輪寺松の尾寺見ゆ皆古刹ならん三重の塔昔さかへし様をあらはす

雨猶やます僧の教ゆるまゝに細き小道を西北にたどりてゆけば程なく龍田町につきぬ晴間まちかてにひるけをたうへぬかくする内空やうく青くなりければ龍田の社へとゆく一里計でしどもふ山の麓にやしるあり風神をまつるゆゑよしは日本記などに見ゆ

こより龍田山をこる河内國高安の郡にいつるなり風ふかはの歌伊勢物語に委し風ふか半にや君かひとはここのわたりの夜半のさまをおもひて女のみしものならん少西北にゆけば神南備神社とて杉むらの内にさくやかなるかありされは此所を神なひのもりといふならん三むろの山はこの社の東にて龍田川はそかふもどを流るゝ小川なり末は大和川に

落るさて大和川にかけたる橋を渡り王子村なる片岡山又傍丘山とかの達摩寺にまうて
 ぬしなてるやかたをか山の歌拾遺集にうゑてふせる旅人あはれおやなしものかたきは皆この寺
 にてありしことなり又孝靈天皇の陵傍丘鳥坂上陵を拜し西にむかひてゆくあたりは皆山
 はかりなりうちにも葛城金剛の峰は群峰を排して氣かたぐいゆ今朝の雨甚しかりしに
 や道の抵きところ溜池などには水みちたり下田村よりはみちよし
 田島の灌漑はいまたれのれらの見ぬ仕かたにて大なる池を掘り冬春の雨水をたゞる五六
 月にいれは一方の樋より自由に稻田にそくとなんかくてくれ方當まの里にのきぬ道の
 程は龍田より四里計なり

この里の葛城山のふもとに當麻寺あり催馬樂に葛城の寺の前なるや云々とあるはこの寺
 のとなるかさてこの寺は白鳳の度役の行者の開基にて天武帝の勅願寺なり其後天平寶字
 七年中將姫この寺にいりたまひてはちすの糸をもて丈六の曼陀羅を織りたまひしところ
 なり姫廿九歳の像ありすかたかたち瑞嚴にて吉祥天女もかくやとおはゆこの堺内に二つ
 の塔あり一を東塔といひて上宮皇子の建立一を西塔といひて役の行者の建立なり柱は楠

をもちひたり寶物は曼陀羅機杼の竹來迎松引接松黒髪の名號製藥の井戸などあり
 宿より人力車にのりて竹内高田忌部曾我小綱なんといへる村々をすきて今井まらにつ

くこのはつれに緩靖天皇の陵 排花鳥田 丘上陵あり白樺村の内にて四條といふところなり少へた

りて畝火山の陵ありともおなし村の太久保と山本との堺にていみしく大なりまわりの
 いし垣は四百七十一間ありとかや又内外のつひちには松などおひしける此の南にかしは
 原の宮あり大祖神并に皇后をまつる日本記曰觀夫畝火山東南樞原地者蓋國之塊區手可治
 之是日即命有司經始帝宅中畧辛酉年春正月庚辰朔天皇即帝位於樞原宮云々とありていと
 もかしてき地なりざるをいくそのよをへしまゝにそのあと所絶ぬんとせしを明治の廿一
 年西田の某ころさしある人々をかたらひて再興をはかり廿二年の彌生この地をつくる
 ひおなし年の秋内侍所などをうつし又の年に大祖神皇后をまつり樞原神社とよなふる事
 とはなりぬ

此所より天の香貝山東北に見ゆればいさのほらんどいへと友どちの吉野までゆかぬ内に
 日くれんといへはしひてもいはてやみぬわはれての山より國見をすればいかたおもし

ろからんとかのやまどにはの歌萬葉集やまどにはとにやまあれどとりはるふ天うちすん
 してあとふりむきつゆくこれに耳無山とちねひ山をわはせて大和の三山とはいふな
 りうへやすの池おもひいてらるすこし西に池尻村ありとも又白かしむらの内にて懿徳天
 皇の陵畝火山南織あり三四町南に久米寺久米皇子の建立あり徒然草にいへる久米仙人の舊せき
 わり元享釋書拾遺集に「岩橋の夜のちりも絶ぬへしあくるわひしき葛城の神」とよめる
 もいみしきゆゑよしあり岩橋とは久米の岩橋のとなり
 欽明天皇の陵檜隈坂は坂合村の内なる平田といふ所なりこは宣化天皇の天の下しるし召
 し宮居のありし所なれば里人に種々尋ねれども皆とりくとのみいひてたしかなら
 ず又古今集に「さひのくまひのくま川に駒とめてしはし水かへ影をたに見む」とある川も
 いつれにやとたすねれとこれなんめりと里人もしらすわはれふるまわと所のかくもさ
 ゆくはいとく口をしきことなり
 十一時四十分檜前にやすむ家こどに糸をつむきはたを織る畑つもの田なつものよし
 上子島村より高取町にかるこにはもと城ありたれも今は石かけはかりなり明治は

んるとき天誅黨のいひさわりじどころなり是より山越となが清水越といふこの頃新道ひ
 らけたりといへともたよ山のはらをかきならしたるまでのとなればのほり下りいくたひ
 となきに是つかれてあたりの氣色も得なからぬ
 午届二時道のかたへなる壺坂寺にいたる山號を香高山といひて文武帝の御宇辨基上人の
 開基にて元正帝の勅願寺なり此の奥に空海修法のとてるありとへとゆかす
 堺内はよも山ばかりにて法師はらのすまんにはいとよからんされは花山天皇の御詠歌に
 もいはをたて水をたふへてつは坂の云々とのたまひしおもひてもそのさまやしるへし
 かくて四五丁のほれば下り坂となる六田のさとはこのふもととなりむつたの淀といひて柳
 の名所なるよし古歌にあり吉野川はその前つちをなかれてけしきよし高取よりさて川を
 るとて三里

吉野川よしやかたみとなるならばひかじのすかたしはしとよめよしとらふうちら
 んねははや岸につく

吉野山はこの川さしよりそひわたつ十六町ほどのほれば吉野社とて後醍醐天皇をまつれ

むじはしやすむ猶ゆいぐとばくなれば日はいつじかかたふきて山はいとよさひしきな
 りぬさどよく夕風谷の水音は物すこし道のかたへに五輪の石のこけむしたるかあり、如
 何なる人のゆかりにかどたそかれながら打はらへば、村上義光の墓なり、けにむかし某か
 文の言葉に「からはけうとき山の中に納めて、さりぬへき日はかり詣つゝ見れば、程なく
 卒都婆もこけむし、木葉ふり埋みて、夕の嵐夜の月のみとことふよすかなりける、思
 ひいて問人あらは程こそあらめ、とも又程なく失て、聞つたふる計の未々は哀とやはお
 むふ、さるはあどとふわさもたへぬれば、いつれの人と名をたにしらす、年々の春の草の
 みと、心わらん人は哀と見るへき、はては嵐にむせひし松も、千とせをまたて薪にくたか
 れ古墳はすかれて、田となりぬ、そのかたうになくなりぬると、悲しき」とあるも、又もろ
 こしの詩に名留無貌松丘下、骨化爲灰草澤中、石上碑文消不見、古人墳際淚生紅、とあるも
 けにさるにもとかなしゆうなん、おはれかゝる心は、やまどもろこし、昔も今も、おなして
 どなりけり、と涙なからに、草などとり水を手向てかくなん、
 後のかたみとたておさし 君かむくろの墓しるし

こけさへかくはおひむして たれおどつるゝさまもなし
 法の文よむてゑなくて ねくらにかへる小鳥の
 羽おどのみと身にいしむ
 さまれかくまれ其むかし 君かつくせしまてころは
 いかてきゑぬるとさあらん 人のいひつき世々のふみ
 世のますら男の鏡とと ゆく末高く仰きみん
 どうたふ少下りて、君の碑なりとて大なるかたてり、おはれよきことは、おほへぬものに
 や、どかたりゆく、
 花さかり山は日ころの朝はらけ「てふ、はせをの句はかたへにあり、このわたりを、一目千
 本の櫻といふ、今すこしみやひたる名に、あらためまはしき心地とする、
 六時三十分はかりに、たつみやといふにやとる、
 宿のあるしいへらく、明日は大峯まうての人多かり、いて君たちもしかせすや、とすゝむ
 れども、夜一よ降におかすことなれば、なかくの事とていなむ、

卅日朝とくおきて、なかむる空、いどうらふかなり、あはれ春ならは、とひとりてたる、
 大なる銅の鳥居 高二丈六尺廻壹丈壹尺 をすきて、やうのほりたる所に、勝手の社あり、い
 にし年やけにければ、いまはたゞ小さきかりやに、おはします、このかたへに袖ふるやま
 あり、萬葉集に、おどめらか、袖ふるやまの、水垣の久しき時ゆおもひてし家は、とあるは
 この山なり、又千載集に、わきもてか、とてふるやまも春きてと、霞の衣たちわたしける」
 とあるもこの山のことなり、猶古歌あり、又古今集「みよし野の、山の白雪つもるらし、古
 郷さむく成まさるなり」新古今集「みよしの、山の秋風小夜更て、古郷さむく衣うつなり
 」などことを古郷といへるは齋明、天武、持統の諸帝の、御殿もあり、御幸もありし所なれ
 はしかいひたるなり、左の方の岡に吉水神社あり、もとは院とのみいひけれども、明治の
 世となりて、社と改められたり、さて元弘の初年、世のなかいみしゆ亂れければ、時の御門
 後醍醐天皇は、しはしとて此の院に、うつらせたまへり、夫より二代の天皇も、こゝにとゞ
 まりたまふ、うちにも後醍醐天皇は、和歌を好ませたまひければ、をりにふれて、よみのこ
 したまひしうたいと多しをか内に

こゝにても、雲の腰さきにけり、

たごかりそめのやとよおもふに、

あふここのいむなしき空のうき雲は、

行衛もしらぬなかめをとする、

花に寝て、よしや吉野の吉水の、

枕のもとに石はしる音、

美よし野の、山のやまもりことよはむ、

今いく日ありて、花やうくらむ、

あはれこの御歌、いかにおもほしめしてよませたまひけんかくていかにもして、あはれ
 なる世の民草を、平らけく安らけく、おひたしめんと、朝に夕に大御ところを、くたきた
 まひしかども、終にはこゝにて、雲かくれたまふことはなりぬ、つまづくの御かども、皆お
 なし、されは二代の遺物はかすくあり、おのれかくなにくれの物を見てまつるにも、
 落る涙はとよめあへず、

幾世へし、そのいにしへをうつしつる、この吉水の影をたふとし、と口すさみぬ、さて如意輪寺へとゆく、みちに山口神社、竹林院にまうす、又すてしへたよりて、塔尾陵ありてけに下にし君をおもへはの歌新古今集九重の玉のうてなもゆめなれや苦の下はし君を思へは今さらにあはれなり、かたへに後龜山天皇の陵もあり、やう南に、苦の清氷西行庵あり、この奥に奥千本の櫻あり、くたれは如意輪寺なり、小楠公のもどり塚やしりのあとなどあり、かくて堺内をまはり僧坊に入り、茶などもてなざる、又案内をつれて宿にかへる、十時櫻山を下り丹治といふところより、飯貝の里にいて、吉野川を渡る、舟中いもせ山を見て、

世の人の、いもせの鏡萬代の、のちまで見よと、山はそひゆる、舟は上市につく、こゝより伊勢國飯郡へゆく道と、この國の松山と、多武峰へゆく、三すしの道あり、おのれたちは、多武峰の道をとる、これも山道なり、峠をつたひ、谷をわたりてゆくなり、とか所々には、藍ふりいたしたるかごとさ水の、大なる岩ほにあたりて、うちくたけ、あるはよとみたる水の、高さより落ちくたると、いもせのまじいゆきく、瀧の畑といふ山里につく、こゝは吉野の里と、多武峰と、ねせんとも中にあたる、龍門の瀧、龍門の寺へは、この里よりゆめをかや、をゆする十計の男の童と、七つ八のはかみの女の童、二つたり四つたりたあふ、人目かれたる所まで、いもせなりかしければ、さつつかたの村にて、いもせたりしくた物などどちせて、いろいろの事かたりそめたれといもせはつかしむて、言葉すくなにうちふて、は今しも學びやより、職家にかへるさなり、あはれかざるかよわき童の、かざるさかじき山道を、あつち日も、さむき日も、いとひなくかよへるさ、のけなげさよ、これにつけ我郷里の如き、たよりよき土地の童は、二人につとめてやはあるへき、とさる彼等をいたわりぬ、かくて鹿路辨内のふたむらをすきて、三時卅五分といふに、多武峰につく、入口には女人禁制の石柱たてとも、今はみだれてかひなし、たよしむかひさぬし様を、おしはかるたよりともなりぬへし、飛鳥井郷の歌に、さして見れば、こゝも櫻の峰つとさ、吉野はつせの花の中宿、とほよくもいはれたり、このわたり櫻、もみち多し、高光の少將して、い髪

多武峰少將物語にくはし、のあどはいかになりにか、
 峯は孝徳天皇の皇子、定惠和尚の開基にて、のち中臣鎌足をまつり、談山神社といへり、社殿十三重の塔、淡海公の社殿など、青に赤にぬりたる、いとするはし、堺内何となく寺めさ

たり、日本の五臺山といふ。

御山を下りてしはらくにして、岡の里あり。こは日本記にある、飛鳥の岡とあるところなるべし。

岡寺、「つゝしむへと年にて、過にしるるるの初午の日、龍蓋寺へまうて侍りて、「云々水鏡發端の」とあるは、この寺のことにて、もともともかもとの宮のありし舊せまにて、おかよ條にあり。りすてし東の山さはなり、清見原の宮は、この南と日本記にあれば、いつれ近き所ならんともおもへども、尋ねず。

一日、天氣よし、七時いてたつ、程ちかき橋寺にまうつ、この寺は我國にてもとも年ふりたる寺にて、二千年あまりも経たらん、上宮皇子降たんの場所などあり、橋といふは、その上垂仁天皇の御代に、多遲麻毛理といふ人を、常世の國とかやにつかはし、たまひしに、十年の後橋を採りて、かへりしによりをこの地に植させたまひけるより、寺號となせしとそ、左右近の櫻、黒駒、二面石、墨染櫻、橋形燈籠などは、この寺の寶物なり、飛鳥川はこゝと、岡との間を、なかるる川をいふ、この川になかく、明日香の飛鳥神社あり、

催島樂のあすかおもひいでらる、天照大神の鏡天平年間作周圍一丈五尺六寸餘厚三寸六分重量百餘斤をまつる山

田、高田、河西なんといふ村々をすぎて、櫻井町につく、こゝは大坂奈良間のステーションのある所にて、いどにさはし、人力車にのりて、大和川のはどりなる初瀬山の麓にいたる、寺へは猶二三町ありといへば、こゝにてひるけをたうへぬ、

さて山にのほる、雨わきには、人家立ならひて、人あまたつとへり、かくて山門に至る、こゝより本堂までは、いみしく長き石段の廻廊あり、さのふ今日の旅路につかれし是もて、つたふは、むづかし、けに清少のかける草紙に、「初瀬まうてのをり、くれはしのほり困して、云々」とあるは、さこそともおもひやらる、本堂に入れば、遠近のをとて女の數、うちむれで、大なるにて、御詠歌とやらんを唱へ、經よむなどいとかしきまし、されとも香の畑村雲とたちのほるひまより、二丈六尺の御かた、さうと見たまへるに、

うき雲も、はれさるやけさ月や見む、今日は誓の初せなり、けり、とよみたるは、をこなりや、夫より執事なにかした、案内しつれば、法師むかへ内陣にみちひきて、寶物を二々教へ見するなど、いとうれし、とて此寺は聖武の御かどの、天平七年にたてたまひたるも

のなれば、古色蒼然としていどゆかし、かくて案内せられて、をちちめくりあり、玉葛の姫君のあととて、さうやかなる庵あり、こは大かた彼の物語を、まことなるものどもひて、後につくれるものによとをかじ、凡て名だかさ山を、寺々には、あらぬくさくしのしひ事をつけて、世の人をまよはすたくひすくなからず、此外俊成、定家卿の塔、貫之の梅尾上の鏡などあり、

せめてはこゝに入相の鐘のおとを、さかまはしどもひしかど、心せくまはた、午后二時すくる頃、寺を辭して三輪の里の方へとむかひぬ、

霧こめし、初瀬の里をたちいて、杉のむら立三輪の山と

黒崎、慈恩寺、馬場の三むらをすまて、三輪の町につく、御やしるは、この東之諸山の麓に

で、祭神は大國主命なり、御神詠に、つぐろはぬ、岩杉をののかすかたにて、影はつかしと、

三もろ山哉、此歌句調言葉あたらしく、正代の歌とは思はれず、されともしはらく縁記のまゝにするす

すと、然れどもふもとのかたには、いとおこそかななるうてなありて、大己貴命の彦命をま

つる、并木松のある所をいづれば、三輪の町はつれにいづ、古今集貫之の歌に「三輪山をし

かもかくすか春霞、人にしられぬ花やさくらん」とあり三もろ山とことなるか、

こゝに奈良までかよふ馬車あり、但崇神天皇の陵 山邊勾丘 景行天皇の陵 山邊道上陵 にまうつ

るには、柳本よりするをよしとす、丹波市といふ所にて、馬車をより、布るの神宮へといそ

く、折しも此市は、今までの村の町となりたるのよろこひにとて、紅のてふちんを掲げ、旗

のほりをたて、酒くみかはし、たみこるをわけ、よろめく足を、ふみしめてうたひありく、

布るの神宮、いその上ふると歌によみ、文にもいへるは、この神宮のあるところをいふな

り、こゝには上つ代の神々の寶を始め、人の代の御門の武器のたくひを藏す、神殿は白河

院の御再建にて、ふるの神をまつると、日本記などにはしく見ゆ、安康帝の宮居のあと、

今はさたかならず、夫木集宮 昔より、植けんときを人しれす、花にふりぬるいその上寺」の

歌あるを見れば、いにしへは寺ともいひけるにや、

布る野、ふるの小野、ふるから小野、布る川などは、このわたりなり、布るの瀧もかなとて、

二三町いてたちたれと、奈良へいそけは、またさまつかたの、みちをたどる、

布るの瀧、ふるとも音の絶せすは、又こゝん年にさくへかりけり」

堺内には大なる木生ひしける、天理教會の本部は、ほとりかし、
 人力車にのり布る川を渡り、標本、田中、今市を経てならにつぐ、
 二日夜半よりそらくもりたれば、かくてはなとおもひつゝ夜をあかす、あぐれば雨はいた
 くふる、さすがに今日はとたすめども、過日のてしたる所々を見んと、友どちの言葉にそ
 うのかされで、うてたつ、
 「わさもてか、ねくたれかみをさる澤の池のたまもを見るそかなしき」と人丸の歌をはじ
 め、古歌而またわれは、いかにもみやひたる池ならんとおもひしに、そかはどりにけ人家
 たちならひてかひなし、されどもむかじはさひしき所なりしならん、うね女のやしる、さ
 ぬ掛柳などあれども、例のつくりごとこのむ人のなせしにや、
 池のはどりをめくりて、東大寺にいたる、そは聖武帝の、天平十七年紫香樂より、遷されむ
 ものにて、あたり八町、坊舎の數廿七ありて、八宗兼學の道場なりしかど、今はいたくさぬ
 たり、
 南圓堂は、八角寶形にて、閑院のおどりのやから、あらはれぬ事をなけき、弘仁四年丈六

の不空羅素觀音を安置して、このさかむをいのらんとて、建てられしと、大鏡などに見ゆ、
 北圓堂、和銅五年八月、元明帝淡海公のために、建て給ひきとさく、東金堂は敏達天皇の八
 年、新羅國よりみつさとして送りしものとて、當時佛教の輸入いかにいみしかりしならん
 西金堂、先妣贈一位橘氏の爲、此の堂を建て、丈六の釋尊、及菩薩羅漢、神王の像を安置し、
 四百の僧を供養して、袖袈裟を施されしといふ、五重塔は聖武帝の御願にて、天平二年四
 月の建立なり、其外中金堂等あれどもはふきつ、彼の重衝のうせにし、奈良坂はこの町の
 北の方なりといへりければ見る、然れども今は人家たちならひてわかす、今所の人のいへ
 るまを下に注す、
此の奈良坂に二様の説あり、一は山城國木津にいつるものと一は歌姫
 越となり古の奈良の都は平城の地にありしを以て、(地圖參考)主とし
 て歌姫越より山城の方にいでしなるへし萬葉集にある長屋王の歌に(佐保すきてなら
 の手向におくぬさは妹をめかれす逢みしめとそしの歌を見ても佐保川を渡り北にゆき
 しや明らけし今此處を古奈良坂といへり萬葉集の佐紀山、高野原は程ちかし又木津に
 ゆくものは今の奈良町の北方にて人家のあるところなりとて重衝はさられしとお
 もふはわやまりなり平家物語南都炎上の條に曰大將軍には頭中將重衝中宮の亮通盛都
 合其勢四萬餘騎南都へ發行す南都にも(中略)奈良坂般若寺二ヶ所の道を掘り切り搔た
 てかさ逆木引きてまぢかけたり云々とあり今の地形には般若寺奈良坂同し道すぢなり
 さるを僧徒いかに兵を知らぬといへ二重に防禦の兵をかかんまひて二ヶ所とあるを
 やされば古の奈良坂は歌姫越なり

かゝるまゝに、雨やうく晴れんとすれば、京都にいそぐ、木津川と渡るとて

春日山、かすかに雲の晴れをめて、木津の川霧たちのるなり、とよむ、

三日、天氣よし、けふはあのをれらのほりせし、名所のかすくを見卒へたれば、いさ歸らはやど四條のやどをたち、東行一列車にのり込ぬ、

十一時大垣ステーションにつく、こゝにてひるけをたうへぬ、人力車にておのかやどりふかへりぬ、

九日の旅、またそのふの心地すれど、やどにはまことにまことに、ことなくかへりしをいはふかくてその夜は一家まを居して、見さしことを語りもし、とはれもして、夜をわかす、

青によし寧樂

糧原に殿つくりしたまひしよりこのかた、世々の御かど、思ひの儘なる所に宮居せられ、甚しきは、一代に三度も、都かりせられし、御門さへありき、おもふにてはまたく、くらのひらけゆくにつれて、施政の位置、よるしからぬやふになりゆくまゝに、かくはせさせたまひしならん、あるは皇子たちの、帝位につかせ給ひし後も、おのかすみたまひし所を都どなし給ひしにもよるならん、しかはわれ共、そか位置は、此の五畿内なりしなり、たゞ景行、成務、仲衰、天智、弘文の五帝のみ、志賀に、角鹿に、居たまへり、こゝに元明帝の和銅三年、紀元千三百六十八年持統文武の二帝の、都なる藤原より、このならへうつらせたまひしより、日本紀曰、爰以忌賀鎮座於和理武輿坂上則卒精兵進登那羅山而軍之時宮軍屯聚而鎬阻草木因以號其山曰那羅山云々とあり古事記作那良山には和訓ならんと云ふの始めか元正聖武、孝謙、淳仁、稱徳、光仁の六帝の、都とはなりぬ此間七十年間を、寧樂又平城後世の朝とよむ、

ともく、七代帝都の規模は、平安京の如く、朱雀の大路をま中にたて、左を左京といひ右を右京といひて、兩京ともは一坊より、四坊までありて、北は北一條より、南は九條まで

十すじの大路あり、此の北端は、大内裏にて、即ち左右京一坊の大路の間と、北二條と、三條との間なり、てたひおのれ東大寺より、正倉院の天蓋門を経て、法華寺村にゆきし道は、舊敷地なる、一條の大路にて、今もたゞししく残れるものなり、
 大内裏の舊跡は、是とぞれもひて見るべきかたちなし、たゞ小高き所、低き所などを、彼はおもひおはするのみ、され共内裏宮、大宮、大黒殿、都跡、馬場、なんといふ、あさ名の残れは、うたかふへくもあらず、

北一條、四條、六條、七條、九條を除きて、一條通は、今の奈良町にある、東包永町筋につくき二條通は、油留木町江家次第曰申日著梨原次正裝後大路如一條大路儀經山階寺北東着拔殿笠是通街なり云々とあり大路とは此の二條通の事なり
 三條通は此大路は三條ステーションより尼ヶ辻並橋本町元要記曰建久二年辛亥十月廿九所橋本町與南院着御云々是より西三條の大路まで上三條下三條町あり五條通は、京終町、八條通は、明治村、北永井につくけり、大路、五條、六條、七條、八條、九條などのあさ名は、このわたりにあり又今御門、高御門、下御門なんといふ町は、元要記に見ゆ、聖武帝の神龜年間、七星北斗七星貪狼、巨門、祿孝、文曲、武曲、廉貞、破軍、にかたどり、建立せられし門の名の、今もこのれるなり、

かゝるいみしく廣かりし都は、今の添上、添下の二郡に、またかりて、右京のはては、遠く郡山までゆき渡りしなり郡山は右京一坊大路と二坊大路との間に位せりしかのみならず、此の時代には、又我國の文學も最盛を極めたり、はしめ孝徳帝の位につき給ひし時、大に唐制を摸したまひたれば、朝廷の風儀を始め、學術、技藝は更なり、世の中の習慣まで、いつしか唐さまにうつろひて、我國固有の觀念は、亡ひなんどしたり、即ち國文は、漢文となり、國歌は、漢辭とをなりにける、彼の大寶令、近江律令を修正し持統帝の時之を頒布して刑部親王不比等真人古鷹等之を標準として撰定せしものなり懷風藻などは當時漢學の盛なりしこと、又文として、詩として見るべきものなり、
 この勢はよゝさかたれば、天智帝は大に學校を興し、唐の學藝を教訓したる事とはなりぬ、

第壹 大學寮 都に置

大學寮	明經	史記
明法	兼て文學に通せしむ	漢書
法律	左氏 論語	後漢書
刑名	周易	爾雅
	尙書	周禮
	儀禮	
	大法律令	

算數 天文 數理

孫子 三開綴術

第貳 國學寮

國學寮 經籍を主として兼て普通學を修めしむ

あはれかゝる様にのみなりゆかは、我國固有の文學は、絶たらしむに、のちの御門天武帝は、いたくさとりたもふ所やありけむ、せちに保守の主儀を、採りたまひければ、我文學は、一大面目をあらはしぬ、これをおのれか今述んとする、平城朝文學の發達せし、もとゝもなりしなり

つらくこれ考ふるに、此の時代の文學は、遠く推古帝時代の文体の命脈を保ち來りて幾多の變遷にあひ、今や完全に國文學のものとを、つくりしなり、且漢文旺盛の後を受たれば、字音にて能く國文を讀めたすを得る事となれり、古事紀、宣命は、その重なるものなり、此の時代の一大著述を記すれば、左の如し、

- 古事記 光明帝和銅五年 大安曆の撰國文 元正帝四年舍人 親王の撰漢文
- 續日本記 國文体作者不詳 風土記 元明帝和銅六年の勅撰 欠本多くして全からず

萬葉集

橘諸兄の撰後大伴家持之を増減せり 續日本記中に載せられたるもの

片假名の作 作者不詳

右を一々論せまはしけれども、是等は他日をまぢ、精細にもせん、さて國學はさかゆきて、國歌の如きは、短歌長歌ともに、壯麗、質樸にして、一誦すればその紀妙、否天然の美質におどろかさるものなし、人麿、赤次人の如きは、貫之此を評して、我國の歌聖なりといへりかゝる人さへいてきしなれば、その榮おし様、おもひやらる、其他家持、旅人等も、又同列に加はるべき人ならんか、

萬葉集をひもどくに、如何なる賤の男、賤の女にいたるまで、をりにふれては、まよよみいてたる歌あり思ふに當時は、雅俗の言葉の、分ぬさりしによりしなり、古今集の序に、見るもの聞くものにつけ、いひいたせるなりとは此等のことをいはれしなり、質樸なる歌のさまは、これらによりてしらるるなり、

さて又、此の文學の最盛につれて、いてたるは儒教と佛教となり、かくて我が文學の性質は、又たて様なる、模様を織り致しぬ、されは世の學者どもは、奈良の朝をとなへて、文學

最盛の時代並に衰たひの時代といふなり、しかしてこの儒教の勢は、再び平安朝文學の、
淵源とはなりぬ、

佛教は、藤原の朝までは、さしたる勢もなかりしかと、奈良朝にいたりて、代々の御門深く
之に、歸依したまひしをもて、在野もまた之を信仰するに至れり、
かくわれはこそ、官人、庶人までも、財寶をなげうちて、堂伽らむをいとなむ、これにつれ、
建築、彫刻を始め、鑄工、其他百般の技術にいたるまで、いみしく發達せり、(印刷の發明板
刻の發明あり)此の時代に建てられし寺の重なるものは、左の如し、

- 東大寺並に五重塔 興福寺 般若寺
- 眉間寺 法華寺 元興寺
- 西大寺 秋篠寺 唐招提寺

これのみならず、六十餘州に建てられたる、國分寺を始め、今も名刹と仰ぐものゝ内にて、
此の時代の建てられしものゝ多かり、佛教の勢かくもさかんなりければ、名僧の輩出は
又自然の勢なり、次に示すは重なる僧なり、

- 善元 良辨 玄昉
- 道璿 鑑真 行基
- 道茲 秦澄

かくて是等の僧侶は、華嚴宗を傳へ、律宗を弘め、あるは本地の説をたてしなど、其盛大を
極めしはあやしむにたらず、從て神社佛閣の所々に建てられたるは、恰も雨後のさわらひ
の如き者なりしならん、おもふに是等の僧侶は、平安朝の佛教家を輩出せしめたる、導者
なり、かく我國佛教の盛大文學美術技藝百般の發達せしを見もし考へもするには、此の大
和をおきて他にもとむへきの地なし、されども幾十年の今日、大厦高樓もやうくわれ
んどし、棟のいらかには昔を忍ぶ小草の生ひたるに、秋風かよひ、築地は崩れんとしてつ
たなど時を得顔にまつはれり、やれんとしたる樓門のかたへの老松は、昔かたらん様なれ
どもさりとてはたつぬるよしなし、塔の九輪半天にそひゆれども、粉壁いたすらに落ちん
どせり、けにやかのさつて獨音もかふる様にやなりぬらんと、いとあはれなり

明治二十八年二月廿一日印刷
明治二十八年二月廿四日發行

明治二十八年二月廿一日印刷
明治二十八年二月廿四日發行

著作者兼
發行者 神谷保朗
岐阜縣席田郡加茂村九番戶

印刷者 片山克武
岐阜縣岐阜市泉町四百二十四番戶

發行所 郁文堂
岐阜縣岐阜市泉町

印刷所 啓文社
岐阜縣岐阜市泉町

GT-28

民國二十八年一月一日

中華民國二十八年一月一日

中華民國二十八年一月一日

中華民國二十八年一月一日

中華民國二十八年一月一日

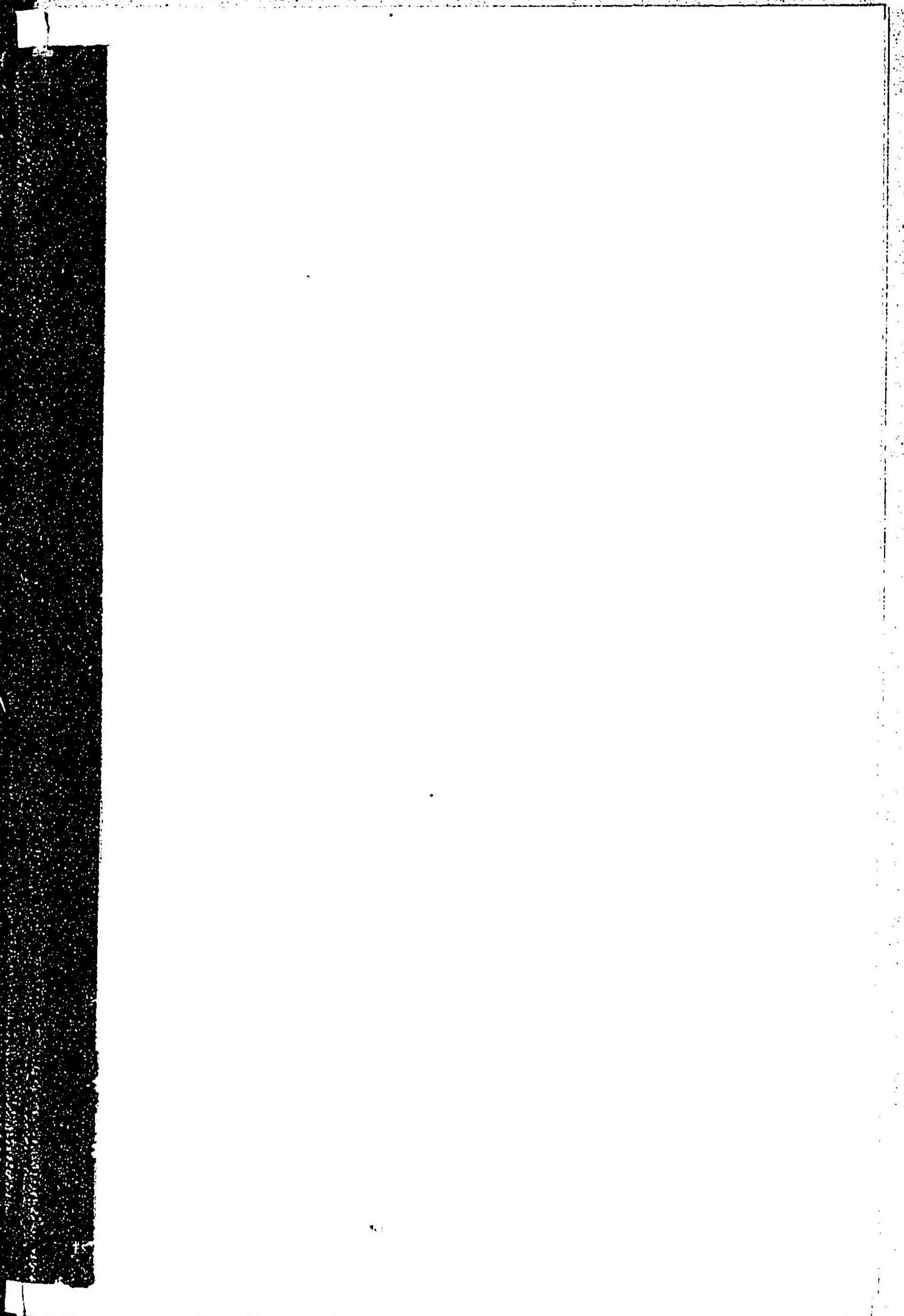
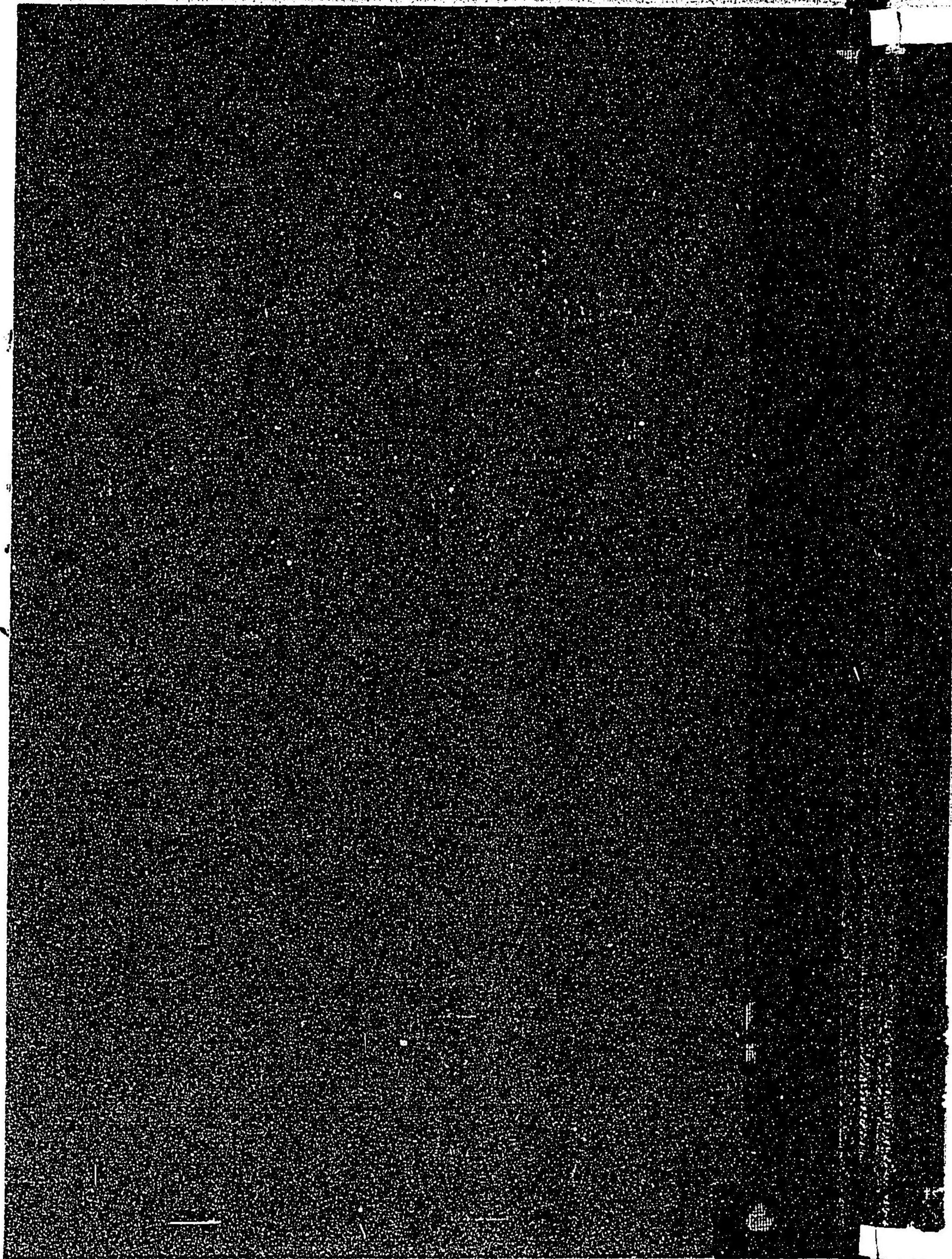
中華民國二十八年一月一日

中華民國二十八年一月一日

中華民國二十八年一月一日

民國二十八年一月一日

民國二十八年一月一日



特49

652

大和めぐりの記

国立国会図書館

025705-000-5

特49-652

大和めぐりの記

神谷 保朗(露のや)/著

M28

ADC-3239

